



Title	19 世紀中世主義詩学に見られるメタヒストリーの歴史観
Author(s)	関, 良子
Citation	Osaka Literary Review. 2022, 60, p. 19-42
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88499
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

19 世紀中世主義詩学に見られる メタヒストリーの歴史観*

関 良子

1. はじめに

中世主義(Medievalism)という用語は、今日では英語文学の研究領域の一つとして認知されるようになった。2016 年に *The Cambridge Companion* に Medievalism の巻が加わったことは、この言葉が単なる用語に留まらず、西洋文化・世界の文化を考える上で重要な一つ概念・思潮と認識されるようになったことを示す現象だとも言える(D'Arcens)。とりわけ 19 世紀は中世主義の最高潮として、これまでも多くの研究書で論じられてきた(Jones 21)。ただ、この用語は一方で 19 世紀の文人が過去の時代に詩の題材や社会のモデルを求めようとする姿勢を指すときに、あまりにも便宜的に都合のよい用語として使われてきたきらいがある。しかし 19 世紀の文人、特に詩人が過去の時代に詩の題材や社会のモデルを求めようとするとき、その対象は決して中世という一時代に留まるものではない。

例えば、一般的にイギリスの中世主義詩人とみなされる Alfred Tennyson、William Morris、Matthew Arnold らは、ギリシア・ローマ神話を題材にした詩や論考も多く残している。Tennyson には中世アーサー王ロマンスに取材した大作 *Idylls of the King* (1859-1885) があるが、彼は “Ulysses” (1842) や “Lucretius” (1869) のように古代ギリシア・ローマに取材した詩も多く書いている。Morris の *The Earthly Paradise* (1868-70) は、古代ギリシア・ローマ神話に取材した物語と北欧伝説や中世ロマンスに取材した物語が交互に登場する作品である。古代ギリシア神話に基づく彼の前作 *The Life and Death of Jason* (1867) を評する際に、Walter Pater が “The

modern poet or artist who treats in this way a classical story comes very near, if not to the Hellenism of Homer, yet to that of the middle age, the Hellenism of Chaucer” (“Poems” 87; cf. *Three Major Works* 526) という表現を使い、“a word must be said about its [Jason’s] mediævalisms” (87; cf. 527) と言って、そのアナクロニズムを肯定的に評価していたことから、Medievalism という用語は、創成当初から題材の時代区分が厳密に中世に留まるもののみを指すとは限らなかったことが伺える。¹ また、中世擁護者とみなされることの多い Arnold には “Empedocles on Etna” (1852) 等の詩作品もあり、彼はホメロス翻訳論 *On Translating Homer* (1861) を書いたことでも有名だ。そして、それらの作品においても、従来 Medievalism として便宜上まとめられていたような姿勢や主張が見られるのである。

では、彼らがこうした、大括りに言う「過去の時代」に詩の題材を求めたのは何故なのだろうか。そして、それらが便宜的に「中世主義 (Medievalism)」と呼ばれるようになった所以はどこにあるのか。本論文では、19 世紀イギリス詩学における中世主義の思潮を、これまでの中世主義研究の文脈ではあまり言及されることのなかった、歴史言説を介して再検討する。その際、援用したいのが Haydn White の *Metahistory* (1973) である。本書の副題は “The Historical Imagination in 19th-Century Europe” で、White は 19 世紀ヨーロッパの歴史家らの歴史解釈を「歴史的想像力」と表現して、そこに見られる文芸的・修辞学的要素を分析している。しかし、歴史の物語性に関する主張や言語論的転回へのコミットゆえに、White の思想は文学研究・批評理論の分野においては、これまで専らポストモダンリズムの文脈で論じられる傾向にあった (Ball & Domańska)。本稿は、White の代表的研究書の一つである *Metahistory* の考察対象が 19 世紀の歴史記述であった事実注目し、同時代の大陸ヨーロッパの歴史家らの問題意識とイギリス中世主義詩のいくつかの作品を照合することで、両者に共通する歴史観をあぶり出すことを目的とする。

2. Medievalism の定義

まず Medievalism の定義を確認した上で、Medievalism が歴史言説の文脈では論じられてこなかった理由から探ることにする。² Medievalism という用語が初めて使用されるようになったのは 19 世紀である。以下に挙げたのは *Oxford English Dictionary* 第 2 版での定義と初出の例文である。

The system of belief and practice characteristic of the Middle Ages; mediæval thought, religion, art, etc.; the adoption of or devotion to mediæval ideals or usages; *occas.* an instance of this.

1853 Ruskin *Lect. Archit.* iv. (1854) 194 You have, then, the three periods: Classicism, extending to the fall of the Roman empire; Mediævalism, extending from that fall to the close of the 15th century; and Modernism. ("mediævalism, medievalism," *OED* 2nd ed.)

例文は John Ruskin の講演 *Lecture on Art and Architecture* からの一文だが、ここで Ruskin は芸術を論じる際の時代を 3 つに区分し、Classicism、Modernism の間にあるべき時代区分を Mediævalism と名づけている。Web 版の *OED* 第 3 版では、これよりも早い用例として 1844 年、1849 年、1851 年の例が挙げられているが、Clare A. Simmons も指摘するとおり、これが「ヴィクトリア朝の造語 (Victorian coinage)」であるらしいことに変わりはない(2)。³

一方で、学問分野としての中世主義研究が始まったのは 1970 年代以降である。創始者と目されるのはアメリカの歴史学者の Leslie J. Workman で、学会 International Society for the Study of Medievalism の創設と学会誌 *Studies in Medievalism* の創刊に尽力した。設立当初から同誌にエピグラフとして引用され、この学会のモットーのように使われたのが、以下に挙げる Lord Acton (John Emerich Edward Dalberg-Acton) が 1859 年に書

いたとされる文章だ。

Two great principles divide the world, and contend for the mastery, antiquity and the Middle Ages. These are the two civilizations that have preceded us, the two elements of which ours is composed. All political as well as religious questions reduce themselves practically to this. This is the great dualism that runs through our society. (quoted in Utz & Shippey 5-6)

このように宣言する Acton もまた、中世を古代(antiquity)と切り離し、文明の両輪の一つであると見なしていることが分かる。Workman は中世主義研究が三つの領域——中世の研究(“the study of the Middle Ages”)、時代のニーズに合わせた中世モデルの応用(“the application of medieval models to contemporary needs”)、芸術や思想上の中世的靈感(“the inspiration of the Middle Ages in all forms of art and thought”)——から成ると定義する(Utz & Shippey 5)。学会設立当初の Workman の意図は、従来からある中世研究と中世主義研究とを区別することにあつたため、力点は必然的に第二、第三の領域、つまり、後世の時代における中世モデルの応用や「創られた中世」に置かれることになる。

このような中世主義研究の定義は、現在にも受け継がれている。例えば 2013 年に出版された Pugh & Weisl の *Medievalisms* では “[D]espite the unpleasantness of historical reality, the Middle Ages is magic: it is continually reborn in new stories, new media, new histories. [. . .] [A]lthough the Middle Ages did in fact end, medievalisms, it appears, will never cease to be reborn.”(Pugh & Weisl 1) と述べられ、中世はある種の魔力を具えたものとして「複数形の中世主義(medievalisms)」として復活を続けると説明されている。冒頭で紹介した *Cambridge Companion* でも、序論の著者

D'Arcens は、Medievalism は「発見された」中世(the “found” Middle Ages)と「創られた」中世(the “made” Middle Ages)とに暫定的に区分することができるが、“Looked at more closely, however, the distinction between ‘found’ and ‘made’ medievalism does not hold”と、両者の根源は同じところにあると主張する(2-3)。

ここに Medievalism の思潮が歴史言説の中で議論されてこなかった理由を見出せる。つまり Medieval Studies から切り離されて確立した Medievalism Studies、そして歴史上の中世ではなく、何度も再生産される中世、あるいは新たに「発見され」「創られた」中世である Medievalism は、常に歴史文脈から切り離すところから議論が始まっていたのだ。それは D'Arcens の “ideas of ‘the medieval’ as a conceptual rather than a historical category”(2)という表現からも読み取れる。しかし、二項対立的な思考が崩れて久しい現在、中世主義研究が設立当初の基盤としたような、古代と対立する概念としての中世はもはや成り立つはずはなく、また、先の引用で D'Arcens が述べていたとおり、「創造された」中世と「発見された」中世との間の区別も、最近の中世主義研究では崩れてきている。他方、歴史研究においても、史料編修(historiography)が歴史の忠実・客観的な説明ではなく、記録者の主観・主張が反映された、創作性を孕んだものであることが指摘されて久しい。その意味で、中世主義と歴史言説との間の境界は徐々に薄れている傾向にあると言えるだろう。

では、19 世紀に過去の時代を詩のモチーフとした、いわゆるイギリス中世主義詩人らと、同時代の大陸ヨーロッパの歴史家らの間には、その歴史観の共通項を見出すことは可能だろうか。ここからは White の *Metahistory* を援用し、その可能性を探りたい。

3. 19 世紀の歴史言説

「はじめに」でも述べたように、White は 19 世紀ヨーロッパの歴史家

らの思想を考察するに際し、彼らの思考を“historical imagination”と表現し、その共通項を Metahistory という概念のもと分析した。ペーパーバック版で約 450 ページに及ぶこの長大な研究書の序論で彼は、「歴史学は科学か否か」という今日的な議論に対し“history differs from the sciences precisely because historians disagree”と強調する。科学(physical sciences)が、命題の立て方、論証の仕方、根拠となるデータ等、全てにおいて合意を必要とするのに対し、歴史学は合意のない“disagreement”の状態から始まるものと言うのである(White 12)。そして“In my view, a historiographical style represents a particular *combination* of modes of emplotment, argument, and ideological implication”(28; italics original)と述べ、それらの様式の組み合わせが個々の思想家の歴史概念の土台を形成し、文体上の特徴を与えると主張し、さらには“In my view, these grounds are poetic, and specifically linguistic, in nature”(29)と主張する。

Metahistory 序論に見られる、上記のような歴史記述と詩的言語の近似性という主張は、Hegel について論じた第 2 章で更に深められる。White は Hegel の『歴史哲学講義』(*Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte*, 1838)序論を解説する文脈の中で、“Hegel immediately launched into a discussion of *history* as the prose form closest in its immediacy to poetry in general and to the Drama in particular”(88)と説明し、“the historian’s imagination must strain in two directions simultaneously: *critically* [...] and *poetically* [...]”(91; italics original)と主張する。そして Hegel が歴史認識を Original、Reflective、Philosophical の 3 つに分類し(White 97)、Reflective history と名付けたものを更に 4 つの種類“Universal, Pragmatic, Critical, and Conceptual”に分類している点を指摘した上で White は、これらは皆“Metonymical”あるいは“Synecdochic”な歴史理解の属性を呈していると言う(99)。例えば Pragmatic history に関して彼は “[Pragmatic histories] strive to *serve* the present, to illuminate the present by adducing

to it analogies from the past, and to derive moral lessons for the edification and instruction of living men.” (White 99; italics original) と述べており、過去の時代から現代へのアナロジーを引き出し、現代人への道徳的教訓を導こうとする点において換喩的・提喩的だと論じている。

このような、Hegel の歴史哲学概念を援用した White の歴史認識論で注目したいのは、White が歴史のもつ詩的要素に注目している点、そして、Reflective history がすべての種類において Metonymical な、あるいは Synecdochic な側面をもつと主張している点である。特に「過去の時代から現代へのアナロジーを引き出し、現代人への教訓を導き出す」という歴史利用の目的は、19 世紀中世主義詩人らが自らの作品に過去のモチーフを利用するときの態度と重なる。有名なのは Arnold の例である。彼が 1853 年出版の *Poems* の序文で次のように主張したことはよく知られている。

The Poet, then, has in the first place to select an excellent action; and what actions are the most excellent? Those, certainly, which most powerfully appeal to the great primary human affections [. . .] The modernness or antiquity of an action, therefore, has nothing to do with its fitness for poetical representation; this depends upon its inherent qualities. [. . .] A great human action of a thousand years ago is more interesting to it than a smaller human action of to-day [. . .]. (Arnold, *Poems* 657)

Arnold がここで、詩人がまず扱うべきは “an excellent action” であり、それゆえに詩人たる自分は過去のモチーフを詩に採用するのだと主張する行為は、上に挙げた「過去の時代から現代へのアナロジーを引き出す」という歴史の Metonymical、Synecdochic な利用と重なり、これこそ大陸ヨーロッパの歴史家らとイギリス中世主義詩人らに共通した歴史観だと言えよ

う。

4. 19 世紀中世主義詩人らの歴史認識と historiography

では、White が *Metahistory* の第 2 部で分析している 4 人の 19 世紀大陸ヨーロッパの歴史家のもつ歴史認識とイギリス中世主義詩人らの歴史認識を対照させ、両者の共通項を更に探っていきたい。

White は、Voltare や Hume といった後期啓蒙主義の時代の歴史思想家は、歴史を Irony の視点から捉えていたと言ひ、続くロマン主義初期の思想家——Rousseau や Edmund Burke ら——は、この Ironic な歴史理解に異議を唱え、自覚的に「ナイーヴ(naïve)」な、対照的な歴史観を形成させたと主張する。つまり、歴史研究の方法として「感情移入(empathy)」の効力を信じ、歴史と人間性の両方において、啓蒙主義者らが軽蔑していたような側面への共感を培った(White 37)。ここに、考察対象との間に距離をとる Irony ではなく、Metaphor、Metonymy、Synecdoche といった修辞法の用語で表される歴史解釈が生まれたのである。

ここで注目したいのは、White が *Metahistory* 考察に際し、ロマン主義初期の思想家の時代に続く 1830 年から 1870 年に、特に力点を置いたという点である。

It also accounts for the particular tone of historical thinking during its second, “mature” or “classic,” phase, which lasted from around 1830 to 1870 or thereabout. This period was characterized by sustained debate over historical theory and by the consistent production of massive narrative accounts of past cultures and societies. (White 38)

彼はこの時期を、歴史理論についての議論が継続的に行われ、過去の文化・社会についての大部な物語が書かれた時代と位置づけ、“It was during this

phase that the four great 'masters' of nineteenth-century historiography——Michelet, Ranke, Tocqueville, and Burckhardt—— produced their principal works”と説明する(38)。このような時代区分法は、Walter E. Houghton の *The Victorian Frame of Mind* (1957) の例にあるように、19世紀イギリス文学研究でもよく使われるものであり、Arnold、Tennyson、Morris の中世主義的な詩作品が書かれたのも、この時期と重なる。さらに White は、以下に挙げるとおり、上述の4人の歴史家の historiography を、同時代の小説家のそれと重ねている。

Like their contemporaries in the novel, the historians of the time were concerned to produce images of history which were as free from the abstractness of their Enlightenment predecessors as they were devoid of the illusions of their Romantic precursors. But, also like their contemporaries in the novel (Scott, Balzac, Stendhal, Flaubert, and the Goncourts), they succeeded only in producing as many different species of “realism” as there were modalities for construing the world in figurative discourse. (White 39)

このように White は、当時の歴史家らが啓蒙主義の先人たちによる抽象的な歴史像を生み出そうとしながら、結局はリアリズムの断片を提示するのみになっていると分析する。この分析の中に、歴史記述と小説記述との間の境界線の消滅を見出すことができる。これ以降 White は、4人の歴史家の歴史記述(historiography)を具体的に考察するのだが、彼が historiography という語を用いるとき、その意味内容は史料編修だけに留まらず、歴史記述の文体をも含んでいるため、以後、歴史の「書きぶり」という訳語を当てる。

White が最初に注目するのは Michelet である。彼は Michelet がロマン

主義的な世界理解を科学的洞察という位置にまで高める手段を見つけた点を評価し、“For him, a poetic sensibility, critically self-conscious, provided the accesses to a specifically ‘realistic’ apprehension of the world.”(149)と述べている。『フランス革命史』(*Histoire de la revolution*)での彼の書きぶりについて White は “His description of the spirit of France in the first year of the Revolution is a sequence of Metaphorical identifications”(151)と説明しているが、このように説明される Michelet の書きぶりを、White の引用をもとに具体的に見てみたい。

France, he [Michelet] wrote, “advances courageously through that dark winter [of 1789-90], towards the wished-for spring which promises a new light to the world.” But, Michelet asked, what is this “light”? It is no longer, he answered, that of “the vague love of liberty,” but rather that of “the unity of the native land” (440). The people, “like children gone astray, . . . have at length found a mother” (441). (White 151)

フランスが「暗い冬の中を勇敢に前進する」と表現する Michelet の文体には、確かに Metaphor が駆使され、詩的表現が目立っている。

Michelet の書きぶりのもう一つの特徴として White が挙げるのは、上記引用の最後にある、人民が「子供のように道に迷っていた」という表現にも見られるとおり、民衆に注目している点である。『19 世紀の歴史』(*Histoire du XIXe siècle*)序文で Michelet は次のように書いている。

Yes, each dead person leaves a little goods, his memory, and demands that someone take care of it. For him who has no friends, a magistrate must care for it. [. . .]

This magistrate is History. . . . Never have I in my whole career

lost sight of this, the Historian's duty. I have given to many of the dead too soon forgotten the aid of which I myself will have need.

I have exhumed them for a second life. (quoted in White 159)

このように彼は、歴史の役割を「死者の記憶を守る役人」と見なしているわけである。

Michelet のこのような、記録されなければ忘れ去られてしまうような、歴史の中の民衆に注目する歴史認識は、Morris の中世主義的な詩に見られる意識と重なる。出版された詩集としては Morris の第一作となる *The Defence of Guenevere and Other Poems* (1858) には、Thomas Malory に基づくアーサー王ロマンスに取材した詩の他にも Froissart の年代記に取材した詩がいくつか所収されており、それらの詩で Morris は、年代記にも登場しない無名の騎士たちに概して注目する。例えば “Sir Peter Harpdon's End” では、イングランド軍に従軍する無名の騎士 Peter Harpdon が、紆余曲折の末、実在の歴史上の人物である、敵軍フランスのゲ克蘭 (Guesclin) とイングランド軍の上司シャンドス (Chandos) の面前で、まるでチェスのゲームのように命を奪われる (“your life hung upon a game of chess” / W. Morris 1:51) 様子が、劇詩の手法⁴を用いて生々しく描かれる。次に引用するこの詩の結びで、何も知らない恋人 Alice が Peter Harpdon の死の知らせを受けたのち、外で男たちが歌う Launcelot を讃える歌を耳にして、自分の恋人も同様に歌に記憶されるべきだと言って、物語を綴ると無邪気にも決意する場面は、それまでの劇詩で敵・味方双方のもつ残忍さを目の当たりにした読者には、皮肉に響く。

Yea, some men sing, what is it then they sing?

Eh? Launcelot, and love and fate and death;

They ought to sing of him [Sir Peter Harpdon] who was as wight

As Launcelot or Wade, and yet avail'd
Just nothing, but to fail and fail and fail,
And so at last to die and leave me here,
Alone and wretched; yea, perhaps they will,
When many years are past, make songs of us;
That I should make a story in this way,
A story that his eyes can never see. (W. Morris 1: 60; italics added)

また、1857 年ごろに書いたと推定される未完の劇詩 *Scenes from the Fall of Troy* においても、Morris は Priam に、トロイア軍の手で殺されたギリシア軍の兵士たちに思いを馳せさせ、さらには彼らが本国に残してきた母や妻についても言及させている。

And they, how many of them are dead, slain
By our good spears; the autumn damps have slain
Full many *a mother's son*, those who are left
Keep growing gaunt and ugly as thin wolves
While we feed fat; *their white wives left behind*
Are childless these nine years, or take new lords
And bear another breed of hostile sons.
The houses they all loved, far off in Greece,
Are painted fresh by men they knew not of;
Within the cedar presses the gold fades
Upon the garments they were wont to wear;
Red poppies grow now where their apple-trees
Began to redden in late summer days;
Wheat grows upon their water-meadows now

And wains pass over where the water ran,
 The ancient boundaries of their lands are changed.
 (W. Morris 24: 9-10; italics added)

Dianne F. Sadoff は、*The Defence of Guenevere and Other Poems* での Morris の創作意図が、ラファエル前派的な絵画を詩で創作することよりも、人間の葛藤を表現することにあったと分析する(11)。また Florence Boos は「フロワサルによる百年戦争の記述は、マロリーの伝説よりも具体的な歴史的基盤を提供した」と述べ、出版当時に *Literary Gazette* 誌に掲載された書評から、次のような表現を紹介している。

Tennyson writes of mediæval things like a modern, and Mr. Morris like a contemporary. [...] Tennyson is the orator who makes a speech for another; Mr. Morris the reporter who writes down what another man says. (Boos; Faulkner 33-34)

さらに Boos は、初期の詩作品で Morris が戦闘に注目していることについて、若き Morris の念頭にヨーロッパ各地の 1848 年革命や 1853-56 年のクリミア戦争への関心があったのではないかという興味深い見解を示している。

このように、百年戦争やトロイア戦争に取材した詩において Morris は、記録や年代記に残らず忘れ去られてしまった無名の民衆に注目し、彼らが奮闘する様子を、*Literary Gazette* 誌の書評にあるとおり「記録者(reporter)」として記述しており、その歴史認識は、歴史を「死者の記憶を守る役人」と見なす Michelet のそれと重なる。また、このように無名の民衆に注目し、彼らが歴史の中で悪戦苦闘する姿を、劇詩の手法を用いてリアルに描写する姿勢の中に、後年の Morris の芸術観・社会観に見られ

る民衆重視の考え方を、初期の詩作にも垣間見ることができるのである。

2 人目の考察対象 Ranke に関して、彼のいわゆる実在論的な史料編修 (realistic histography)、歴史主義 (historism) の基盤には、ロマン主義の否認があると White は説明する。Ranke はロマン主義的衝動を抑制することで、実際に過去に起こったことだけを語ろうとしているというのである (White 163)。しかし、そのような歴史の書きぶりに至った過程には、青年期の Ranke 自身が Walter Scott の描く騎士道物語の世界に魅了された経験があると White は指摘する。Ranke は Scott の小説を読み、中世という時代をもっと深く知りたいと思い中世の史料に当たったが、Scott の描く世界の多くが空想の産物であることを知り落胆し、さらには史実の方が小説よりも魅力的であると発見した結果、White が呼ぶところの「教義的リアリズム (doctrinal realism)」(164) を目指すようになったというのである。

ただ、このような科学的分析を目指した Ranke の書きぶりにも修辞学的特徴が見られると White は説明する。Ranke は歴史で何が起こったのか、なぜそれが起こったのかを史料から明らかにしようとするわけだが、“In short, the historical field is first surveyed as a complex of dispersed events related to one another only by the strands and threads that make them an arras web of event-context relationships” (178) と White が説明するとおり、歴史は散在する出来事の複合体の中から出来事とコンテクストの関係性を編み上げていくことで、部分と全体を統合させていく。その意味で “Ranke conceived history, then, in the mode of Synecdoche.” と White は判断するのだ (178)。

3 人目の歴史家 Tocqueville について White は、彼は歴史家の仕事を治療的 (therapeutic) なものと捉えていたと説明する (204)。Tocqueville にとって歴史家の仕事は、貴族政治と民主政治の両方の原理がいかにヨーロッパ文明の中にある一つの永続的な衝動として機能していたかを示すこ

とによって、新たな社会制度の創造を手助けすることであった(White 199)。そのために彼は、歴史思想を “to ground living men in a situation of choice, to enliven them to the possibilities of choosing, and to inform them of the difficulties attending any choice they might make” という目的のために使った(White 206)。このように考える Tocqueville にとって、歴史は過去と現在だけでなく、未来をも繋ぐものであったと White は説明する。彼は、社会の概念の複数の選択肢の間だけでなく、過去と未来との間、そして現在と未来との間を調停すること (“to mediate not only between alternative concepts of society and between the past and the present, but between the present and the future as well”)こそ、自分の使命だと考えていたわけである(White 206)。Tocqueville の主著『アメリカのデモクラシー』(*De la démocratie en Amérique*)は、それゆえ “look forward to the future with the salutary fear which makes men keep watch and ward for freedom, not with that faint and idle terror which depresses and enervates the heart”(quoted in White 208)と呼びかける、読者への意味深長な訓告で締めくくられる。

Tocqueville が歴史の役割に見出した治療的要素は、Arnoldが “The Study of Poetry”(1880)で “we have to turn to poetry to interpret life for us, to console us, to sustain us.”と述べた際に見出していた詩の役割と重なる(Arnold, *Essays* 2)。また、歴史を過去、未来、現在を繋ぐものと捉える見方は、Tennyson のいくつかの作品に見られる思想とも重なる。例えば Tennyson の “Ulysses” は次のように述べて、自分の存在を過去に会ったすべてのものと、無限に境界線が消える未知の世界にある未来のものによって定義づけようとする。

I am a part of all that I have met;
Yet all experience is an arch wherethrough

Gleams that untravelled world, whose margin fades
For ever and for ever when I move. (A. Tennyson 142)

また、*Idylls of the King* の作品世界について、Tennyson が “It is not the history of one man or of one generation but of a whole cycle of generations” と述べていたと息子 Hallam Tennyson が伝記で述懐しているが (H. Tennyson 2:127)、そのような姿勢とも重なるのだ。さらには Morris が古建築物保護協会 (Society for the Protection of Ancient Buildings) での講演で述べたロマンスの定義、“what romance means is the capacity for a true conception of history, a power of making the past part of the present” (M. Morris 1:148) とも呼応する。

White が最後に挙げるのは Burckhardt である。彼は Burckhardt の書いた『イタリアのルネサンス文明』 (*Die Cultur der Renaissance in Italien*, 1860) について、“The essay had no proper beginning and no end, at least no end that was a consummation or resolution of a drama. It was all *transition*.” (246; italics original) と述べ、ルネサンスは中世と現代という二つの「暴政 (tyranny)」に挟まれた「幕間劇 (*entracte*)」あるいは「自由劇 (“free play”)」であるかのような書きぶりがなされていると分析する (White 247)。また、Burckhardt の死後出版の書籍『世界史的諸考察』 (*Weltgeschichtliche Betrachtungen*) から、自身の歴史の書きぶりについて述べている Burckhardt の言葉を引用して、“Burckhardt’s historiography ‘lays no claim to system’; his historical pictures, he candidly admitted, were ‘mere reflections of ourselves’” (White 259) と論じている。

このような時代判断も、例えば Arnold が以下に挙げた詩 “Stanzas from the Grande Chartreuse” (1855) で表現した時代認識と重なる。

Wandering between two worlds, one dead,

The other powerless to be born,
With nowhere yet to rest my head,
Like these, on earth I wait forlorn (Arnold, *Poems* 305-06)

Burckhardt の場合にはルネサンスという時代の断片が、Arnold の場合には彼の生きる 19 世紀という現在が、中間世界としてそこに存在し、歴史を扱う者は、Burckhardt の表現にあるとおり、鏡像のようにそれを覗くのである。

5. おわりに

本稿では、歴史言説が中世主義研究の文脈でこれまで言及されてこなかった理由を、中世主義研究が成立する過程より考察した後、White の *Metahistory* を援用して、19 世紀大陸ヨーロッパの歴史家らの歴史観・歴史記述の特徴を確認し、それらが 19 世紀イギリスの中世主義詩人らの歴史観・過去のモチーフの扱い方とどのような共通点をもっているかを分析した。1970 年代に Medieval Studies と袂を分つ形で成立した Medievalism Studies は、歴史上の中世ではなく「創られた中世」に力点を置いたため、歴史文脈から切り離すことから議論が始められ、それゆえに歴史言説への言及がこれまで見られなかった。しかし、歴史の持つ修辞的学要素や詩的要素を分析する White の *Metahistory* を介して見ると、歴史と文芸創作の書きぶりに接合面を見出すことができるのである。

また、19 世紀に造語された際、Medievalism は Classicism や Modernism とは区別される様式を示すとして、とりわけ中世を古代と切り離す言葉として使われていたが、Pater の Morris 評に見られたように、中世主義詩学に関して言えば、当初から詩の題材の時代区分が厳密に中世に留まるもののみを Medievalism と捉えるとは限らなかったことが分かる。「はじめに」で引用した Pater の Morris 評に見られた、“[the Hellenism] of the mid-

dle age, the Hellenism of Chaucer” という表現が見られる直前のパラグラフで、Pater は詩で過去のモチーフを扱うことについて、次のように述べている。

In handling a subject of Greek legend, anything in the way of an actual revival must always be impossible. *Such vain antiquarianism is a waste of the poet's power.* The composite experience of all the ages is part of each one of us; to deduct from that experience, to obliterate any part of it, to come face to face with the people of a past age [. . .] is as impossible as to become a little child, or enter again into the womb and be born. But though it is not possible to repress a single phase of that humanity, [. . .] *it is possible to isolate such a phase, to throw it into relief, to be divided against ourselves in zeal for it* [. . .]. We cannot conceive the age; *we can conceive the element it has contributed to our culture; we can treat the subjects of the age bringing that into relief.* Such an attitude towards Greece, aspiring to but never actually reaching its way of conceiving life, is what is possible for art. (Pater, “Poems” 86-87; cf. *Three Major Works* 526; italics added)

過去の時代を忠実に再現することは不可能であるだけでなく、「詩人の力の浪費」であると Pater は主張し、過去の時代の要素が自分たちの文化に与えた影響を含めてレリーフにすることだけが、芸術にとっては可能であると言うのだ。

歴史の中に現代への Metaphor を見出し、無名の民衆に注目しながら史料編修を行なった Michelet、史料の客観的・科学的な処理を試みながらも、必然的に出来事の一つ一つを連関させる中で、部分で全体を捉えようとする Synecdochic な歴史理解を行なった Ranke、歴史を過去と現在を繋

げるだけでなく、未来をも繋げるような史料編修を行なった Tocqueville、自身の生きる時代を過渡期的時代と捉え、同じく過渡期的な時代であるルネサンスの歴史研究に没頭した Burckhardt——彼らの歴史観と史料に対する向き合い方は、イギリスの中世主義詩人らの歴史観、過去の時代に詩の題材を求めた理由と重なる。

4人の歴史家の考察に入る前に White は、ドイツでは 1810 年、フランスでは 1812 年に歴史学の教授職が確立されたという大陸ヨーロッパと比して、イギリスで歴史学が学問分野として成立したのは遅く、1866 年以降だったと述べている (135-36)。このことを併せて考えてみても、19 世紀のイギリス詩人が歴史的なモチーフを詩の題材に選んだのは、ジャンルの違いこそあれ、大陸ヨーロッパの歴史家らによる「歴史の書きぶり (historiography)」と共通する問題意識のもと、歴史を詩の中に書き留めようとしていたのだと考えられよう。

Metahistory が発表されたのは約半世紀前のことであり、White の論旨はいかにも構造主義的で、すべてがきれいに割り切れすぎているという印象は否めない。また、White の論をなぞり、4人の歴史家の歴史観・歴史記述の方法にイギリス中世主義詩人らの歴史観・過去のモチーフの扱い方を照合させた本稿での試みも、単純化し過ぎているという批判を免れないだろう。しかし、一度これまでの議論で置かれていた古典・中世の間の線引きを取り払い、別の構図から構造主義的な手法を用いて、いわゆる Medievalism の根底にある歴史観を、歴史言説を援用して整理し直すことで、文学・文化研究の中で市民権を得るに至った Medievalism という現象の、新しい理解に繋げることができるのではないだろうか。

註

- * 本論文は第 13 回日本英文学会関西支部大会(2018 年 12 月 8 日開催)での口頭発表の内容に、大幅な修正を加えたものである。口頭発表の内容は科研費研究(若手 B)「19 世紀英詩における同時代主義と懐古主義の相克」(課題番号 26770102)の研究成果に基づき、論文執筆にあたり加えた修正は、科研費研究(基盤 C)「唯美主義と政治性の接点——モリス、バーンジョーンズ、クレインを中心に」(課題番号 19K00394)の研究内容に大きく関連するものである。
- 1 Pater の Morris 評は *The Earthly Paradise* 第 1 巻が出版された際に書かれたもので、1868 年に *The Westminster Review* に発表された。その後 Pater は、書評の残り四分の一を *The Renaissance*(1873)の“Conclusion”として再掲し、残りの部分に、Morris 論を当時の詩の特徴として一般化するような軽微な修正を加え、“Æsthetic Poetry”という表題のエッセイとして *Appreciations*(1889)に発表している。その後、*The Renaissance* の結論部は第 2 版で削除された後に、第 3 版以降、再び掲載されるようになったことは有名である。“Æsthetic Poetry”もまた、第 2 版以降には削除されるという数奇な経緯をたどる。以下、本稿の引用には Peter Faulkner, ed. *William Morris: The Critical Heritage* に載録された書評“Poems by William Morris”を用いたが、参考までに William E. Buckler, ed. *Walter Pater: Three Major Texts* に載録された“Conclusion”to *The Renaissance*(pp.217-20)と“Æsthetic Poetry”(pp.520-28)での該当ページも併記する。
 - 2 Medievalism という用語の 19 世紀の使用例および 20 世紀後半の Medievalism 研究の成立過程については、拙著 *The Rhetoric of Retelling Old Romances* 序論により詳細な説明がある(Seki 3-10)。
 - 3 19 世紀における Medievalism(当時は Mediaevalism と綴られることの方が多かった)という単語の使用例と語義についての研究には、他に David Matthews, “From Mediaeval to Mediaevalism: A New Semantic History”や Karl Fugelso, ed. *Defining Medievalism(s)*(Studies in Medievalism XVII)等がある。
 - 4 ヴィクトリア朝詩において「劇詩の手法(dramatic technique)」とは、単に戯曲の技法で書かれている、あるいは劇的独白 dramatic monologue で書かれているといった形式的な特徴を指すだけでなく、詩人と作品内人物とを切り離す、読者と作品内人物との間に距離を置く等の、作品内容上の効果をも指すものであった。詳しくは拙論“The Young William Morris and the Discussion of the ‘Dramatic’”を参照。

引用文献

- Arnold, Matthew. *Essays in Criticism: Second Series*. Macmillan, 1888.
 —, *The Poems of Matthew Arnold*. Edited by Kenneth Allott & Miriam Allott, 2nd ed., Longman, 1979.

- Ball, K. and Domańska, E. "Hayden White." *Literary and Critical Theory — Oxford Bibliographies Online*. Oxford UP, 30 Oct. 2019, <https://www.oxfordbibliographies.com/view/document/obo-9780190221911/obo-9780190221911-0084.xml> Accessed 25 Aug. 2021.
- Boos, Florence. "Introduction, 'Concerning Geffray Teste Noire.'" *COVE: Collaborative Organization for Virtual Education*, 8 Oct. 2019, [https://editions.covecollective.org/edition/concerning-geffray-teste-noire/introduction-\"concerning-geffray-teste-noire\"](https://editions.covecollective.org/edition/concerning-geffray-teste-noire/introduction-\) Accessed 25 Aug. 2021.
- D'Arcens, Louise, editor. *The Cambridge Companion to Medievalism*. Cambridge University Press, 2016.
- , "Introduction: Medievalism: Scope and Complexity." D'Arcens, pp.1-13.
- Faulkner, Peter, editor. *William Morris: The Critical Heritage*. 1973. Routledge, 2013.
- Fugelso, Karl, editor. *Defining Medievalism(s)*. (Studies in Medievalism XVII) D. S. Brewer, 2009.
- Houghton, Walter E. *The Victorian Frame of Mind, 1830-1870*. 1957. Yale UP, 1985.
- Jones, Chris. "Medievalism in British Poetry." D'Arcens, pp.14-28.
- Matthews, David. "From Mediaeval to Mediaevalism: A New Semantic History." *The Review of English Studies*, vol. 62, no. 257, 2011, pp. 695-715.
- "medievalism." *Oxford English Dictionary*, 2nd ed., CD-ROM (v.4.0), Oxford UP, 2009.
- . *Oxford English Dictionary*, 3rd ed., online, Oxford UP. 12 November 2018.
- Morris, May, editor. *William Morris: Artist, Writer, Socialist*. 2 vols. Edition Synapse, 2005.
- Morris, William. *The Collected Works of William Morris*. Edited by May Morris, 24 vols. Longmans Green, 1910-1915.
- Pater, Walter. "Poems by William Morris." *William Morris: The Critical Heritage*, edited by Peter Faulkner, Routledge & Kegan Paul, 2013, pp.79-92.
- . *Walter Pater: Three Major Texts*, edited by William E. Buckler, New York UP, 1986.
- Pugh, Tison & Angela Jane Weisl. *Medievalisms: Making the Past in the Present*. Routledge, 2013.
- Sadoff, Dianne F. "Erotic Murders: Structural and Rhetorical Irony in William Morris' Froissart Poems." *Victorian Poetry*, vol.13, no. 3/4, 1975, pp.11-26. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/40001828. Accessed 25 Aug. 2021.
- Seki, Yoshiko. *The Rhetoric of Retelling Old Romances: Medievalist Poetry by Alfred Tennyson and William Morris*. Eihōsha, 2015.
- . "The Young William Morris and the Discussion of the 'Dramatic': Defending 'The Defence of Guenevere'." *Kansai English Studies*, vol.1, 2007, pp.59-81.

- Simmons, Clare. *Popular Medievalism in Romantic-Era Britain*. Palgrave Macmillan, 2011.
- Tennyson, Alfred. *Tennyson: A Selected Edition*. Edited by Christopher Ricks, revised ed., Pearson Longman, 2007.
- Tennyson, Hallam. *Alfred Lord Tennyson: A Memoir*, 2 vols. 1911. Replica Books, 1999.
- Utz, Richard and Tom Shippey, editors. *Medievalism in the Modern World: Essays in Honor of Leslie J. Workman*. Brepols, 1998.
- White, Hayden. *Metahistory: The Historical Imagination in Nineteenth-Century Europe*. 1973. Johns Hopkins UP, 2014.

[English Synopsis]

The *Metahistorical* Imagination in Nineteenth-Century Medievalist Poetics

SEKI Yoshiko

Medievalism is a Victorian coinage. When the word started to permeate that age, it was used in contrast with Classicism. If we focus on Victorian poetry, however, we realize that those who are defined to be Medievalist poets —Matthew Arnold, Alfred Tennyson, and William Morris among others— did not always focus on the Middle Ages; instead, their poetical imagination derived also from Ancient Greek and Roman mythologies. That tendency was aptly expressed by Walter Pater as “the Hellenism of the middle age” in his review of Morris’s poems (Pater “Poems” 87). Why did they look for their poetical motifs in the past? And why was their attitude called Medievalist? This paper addresses these questions by reinterpreting Medievalist poetics from the historical discourse in the nineteenth century continental Europe.

First, to find a clue to the second of these questions, a survey is conducted into how Medievalism Studies was established in the 1970s. It emerged and distinguished itself from its long-established parent, Medieval Studies. While Medieval Studies focuses on the actual or historical Middle Ages, Medievalism Studies seeks into the Middle Ages “found” or “made” in later eras. This is one of the reasons why Medievalism has not been fully considered in the historical discourse; the study of Medievalism started when “ideas of ‘the medieval’” were surveyed “as a conceptual rather than

a historical category” (D’Arcens 2). This partly answers the question why such poetical motifs have been named simply “Medievalism,” too; the word indicated not the motifs expressed in such poems but the antiquarian impulse found in those poets.

Next, the attention is turned to Hayden White’s *Metahistory: The Historical Imagination in 19th-Century Europe* in order to find a framework to compare Victorian Medievalist poets’ historical imagination with that of contemporary European historians. Applying Hegel’s philosophy of history, White analyses the nineteenth-century historiography in poetical terms. He also states that historians strived “to illuminate the present by adducing to it analogies from the past” (99). This application of history to the present is similar to Arnold’s assertion that in order to find “an excellent action” poets should seek for one in “a thousand years ago” (Arnold *Poems* 657).

White’s *Metahistory* analyzes the historiography of Michelet, Ranke, Tocqueville, and Burckhardt. Michelet’s belief of historians’ role being magistrates who exhume the dead for a second life (White 159) is similar to Morris’s way of focusing on anonymous soldiers in ancient legends. The ways how Ranke conceived history in the Synecdochic mode (178) and how Tocqueville mediated not only between the past and the present but between the present and the future (206) recall the way how Medievalist poets dealt with past motifs as a part of the present. Burckhardt’s historiography of laying historical pictures as mere reflections of his own era (259) is also resonant with Victorian poets’ use of past motifs. White says that in the “disciplinization of the field of history, England lagged behind the Continental nations” (136). We can find, however, a similar kind of historical consciousness with that of European historians in Medievalist poetics.